

非常時だからこそ

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

新型コロナウイルスによる感染のさらなる拡大が懸念されることから、去る四月六日より全国の倫理法人会の活動を、約一カ月休止すると通達しました。日本政府の方針や緊急事態宣言を踏まえての措置であり、感染拡大の可能性が低い地域の会友の方々にも、どうかご理解ご協力をお願い申し上げます。

先の通達文にも書きましたように、あくまで集会タイプの活動の休止であって、ITを活用したミーティングや学びの空間づくりなど、積極的に創意工夫してまいります。皆様からも提案やアドバイスをお寄せいただけましたら幸いです。

『職場の教養』や『倫理ネットワーク』そしてこの「今週の倫理」も、遅滞なく発行・発信してまいります。つきましては、活動休止期間中の本紙の執筆を担当することとなりました。この非常時における所感や、倫理経営に関することをお伝えいたします。

*

ここ五年ほどの間に、予想外の出来事が多発し、世界の潮流は驚くほど変化しています。一九九〇年代から、ヒト・モノ・カネが国境を越えて往来するグローバルバリエーションが顕著になりました。ところが二〇一六年になって、イギリスのEU離脱や、トランプ大統領の誕生から、自国ファーストの保護主義の潮流が大きくうねり始めます。筆者は、倫理研究所の今年度の事業方針の冒頭を「国際社会における二大潮流のせめぎ合いが、時代の大変動に拍車をかけている」としました。

すると今年になって、中国発の新型コロナウイルスによる感染症が世界中に広がり、大混乱となりました。ウイルスはまるでグローバルバリエーションの申し子のように、壁も境も越えて拡散していきます。それによってなんと、世

界は鎖国状態になってしまいました。主要な都市は封鎖され、引きこもりを余儀なくされてしまいました。

いまやわが国でも非常事態が宣言され、ウイルス禍のまったただ中にあります。これまでの経過を振り返ると、報道に疑念を抱いたり、異論や批判を唱えなくなる政府や自治体の対応は多々ありますが、今はそれを言い合う時ではありません。官民挙げてこの危機を、できるかぎり早急に乗り切らなくてはなりません。

*

日本でも好まれてきた中国古典の『老子』に、次の一節があります。

「道の道とすべきは、常の道に非（あら）ず。名の名とすべきは、常の名に非ず」

詳しい解説は略しますが、「道（タオ）」は変化してやまないもので、「これが道ですよ」と固定化した言い方はできません（「名」も同様）。すなわち「常」とは変わらない、いつも同じことを意味します。

もちろん世の中は刻々と変わっていきます。しかし多少の波風があっても、ほとんどが予測可能な想定内の動きなので、平然と仕事をしたり、生活できます。ところが時に、まったく予想外の事態が発生します。それが非常時、非常事態にほかなりません。

人が頭で考えることを超えている事態は予測不能です。玄妙な「道」とはそのように、人間の思慮を超えていると『老子』は教えました。『万人幸福の策』第十七条の「神は、幽なるもの、説明を超え、思惟（しい）を絶する……」とよく似ています。

*

昔から「苦境に立たされてこそ人の真価がわかる」と（次ページにつづく）



言われてきました。苦境とは非常時です。いまやその苦境は、個人を越えて世界に広がりました。各国の真価が問われています。

国を成り立たせているのは国民ですから、各国国民の質的レベルや実力が、こういう時にあらわになります。九年前の東日本大震災の際に、日本人の秩序正しい倫理的な行動は、世界から絶賛されました。今回もあの時を思い起し、底力を発揮したいものです。

また、非常時に身を置くことで、ふだんは忘れていた大切なことに気づかされたり、知らなかった自分の一面を知ったり、身近な人について再発見することもあるでしょう。

ある人のブログに対するコメントに、こんなことが書かれていました——「学校が休みになり、小学生の子供が一日中家にいるのがしんどかった。ところが、一緒に時間をかけて学習したり遊ぶことで、まったく知らなかったわが子の良さに気づいて感動した」と。また、授業がない学校で、教員たちの会話が多くなり、お互いを再認識したり、学び合ったりしている、という話も聞きました。ある大学では、授業ができなくなったことでオンラインの本格的な導入に踏み切れたともいいます。非常時だからこそ、変身し進化する可能性もあるのです。

この非常時に、会員企業の多くは、大変な試練に立たされているでしょう。平常時とはあまりにも異なる仕事環境となって、戸惑いや怒りや不安を押し隠しながら、必死に耐えていらっしやる。月並みな励ましの声など、届くことはないでしょう。

しかしあえて申し上げます。苦境にあえぐ非常時だからこそ、改めて「苦難福門」を、自分を支えるバックボーンとしていただきたい。倫理経営の厳しさがここにあ

ります。

苦難を喜んで受けとめよ、にっこり笑って苦難に取りくめと、倫理運動の創始者である丸山敏雄は教えました。「喜んで」という心のありようが肝心なのです。

今の全世界的な苦境は、個々人の「生活のあやまり」が原因で引き起こされたものではありません。しかしながら、個人的な苦難でも世界規模の苦境でも、それに立ち向かうときの心の姿勢に違いはありません。暗くうち沈んだ心のままでは、いかなる状況も好転しないからです。

*

ところで世界を苦境のどん底に陥れたコロナウイルスは、「新型」という正体不明の未知のウイルスです。ゆえに人々の恐怖心が煽られ、大混乱の非常事態となつてしまいました。倫理研究所の客員教授にも就いていただいている佐伯啓思・京都大学名誉教授は、三月三十一日の朝日新聞に「現代文明、かくも脆弱」と題して寄稿されました。そこには次の一節があります。

今回のような新型の病原体の出現は、リスクではなく不確実性である。その時からうじて頼りになるのは、政府や報道ではなく、われわれのもつ一種の「常識」や「良識」であろう。政府に依存し、報道に振り回されるよりも前に、自らこの事態をどう捉え、どう行動するかを判断するための「常識」であり「良識」である。

残念ながら今の日本人は、先人たちが有していた豊かな倫理性に基づく常識や良識を欠いてしまったようです。それこそが危機の真因なのかもしれません。

(次回につづく)